令和７年度　東京すくわくプログラム活動報告
仁慈保幼園　多摩川保育園

テーマ　園庭の自然は発見の宝庫！
子どもたちの学びと探究の物語

園庭や保育室など身近に存在する四季折々の生き物や植物等と出会う中で、季節の移り変わりやそれにともなう動植物の成長や変化を知る。自然とのかかわりの中で子どもたちが興味関心を持ったものを探究し学んだ事を表現していく。

様々な素材を使い、子どもたちが想像する物事や感じたことを自由に表現することを楽しみ、豊かな感性を育む。また子どもたちの表現の幅を拡げたり深めたりしていくための環境を用意していく。

【春】

園庭には桜や梅の木、おやこの会で綺麗に植えた花壇があり子どもたちが日頃から手を伸ばし観察や、遊びの材料として活用しています。見ることが中心になりがちな草花ですが、実際に手に取ると梅の実の甘い匂いに気づく子や、ままごとの材料としての活用法を考える子等、子どもたちの遊びを豊かにしています。

【夏】

夏は昨年から育ててきた生き物や、草花の成長をより感じやすい時期です。春に比べ大きく育つ姿に驚く子や実際手に触れてみることで生き物の匂い、質感、動き等にも気がつきます。図鑑等で調べながらも、実際に自分で体験することで自分が考えていた大きさよりより大きい小さいや、幼虫から成虫へと少しずつ体が変化していく姿を毎日の観察で感じ取れるなど多くの学びを得られる機会があります。

【カブトムシ】

カブトムシは多くのクラスで昨年から育ててきました。日に日に大きくなるカブトムシの幼虫はついに成虫になりますが、実際に動き回るカブトムシを触るのはちょっと怖い。そんな中虫が大好きな子がカブトムシを持ち上げて見せると、怖がっていた子も見て学び、怖い物ではないと分かると、いつの間にか持てるようになっていました。同じ興味を通じて自然と友だちの姿から学ぶ様子が見られました。

【土、泥】

園庭には砂場や築山があります。雨の翌日、園庭に出るとまだ乾ききっていない砂や土に子どもたちは気がつきます。手で握りしめると砂は固まり、土は泥になり手から離れません。この感触が苦手な子もいれば、面白がる子もいます。どの子の感じ方も素敵だなと思いつつ、さらに他の感触も楽しめるようにと黒土や赤玉土も用意し子どもたちと素材の違いを感じました。赤玉土は力を入れないと崩れない様子から「石？」と、不思議がる子もいました。

【ひまわり・梅・いちご
ゴーヤ・オリーブ】

プランターで育てたひまわりは種から育てた事で芽が出て花が咲くまでの過程を実際に経験する事で、植物の成長に気づく姿が見られました。

梅やいちごは実の中身や匂いに興味が向いていきました。ゴーヤが臭そうに見えたA君は鼻を隠しつつも興味は津々でB君の反応を注意深く見ていました。

【調理室との連携】

昼食で出るトウモロコシの皮剥きを調理師と子どもたちが一緒になって行いました。普段食べるトウモロコシは粒状になっている物なので「これトウモロコシなの？」と、不思議そうにする子の姿も見られました。翌日の昼食でトウモロコシが出た際には「これ昨日やったやつだよね！」と、嬉しそうにしつつ調理室に行き、「今日のトウモロコシおいしかったよ！」と、調理師との交流も増えていきました。

ひまわりは どこからお花？

5月にやま組の子どもたちとプランターに植え、園庭に出るたび水をあげて育ててきたひまわりがついに大きな花を咲かせました！咲いたことに喜ぶ子どもたちがいる中で、Aちゃんは不思議そうにしていました。

「先生なんか変！」そう言ってAちゃんが伝えてきたのはひまわりの花です。どの部分が気になるのかと思い「どこが変なの？」と、聞いてみると「色！こっちとこっち違うよ！」と、咲いたひまわりの花とまだ蕾の状態のひまわりを見比べて教えてくれます。

どうやら、これまで世話をしてきたことでこれはひまわりという事は分かるものの、花が咲く過程を知らなかったことでなぜ同じひまわりなのに違いがあるのかと不思議に思ったようです。

そこで蕾の方を指さして「これからこっちの蕾っていうのはお花になるんだよ」と伝えるとじっと蕾を見つめて「あ！分かった！ここがお花だ！」と蕾の頭の黄色くなりかけている部分を指さして話しました。

種から芽が出て蕾になり花が咲く。自分たちで育てたからこそ、花になっていくその過程に気付けたように思います。これからも一つ一つ子どもたちの気付きに寄り添っていきたいと思います。

2025年6月27日　作成者：保育士

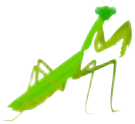
【秋】

秋になるとこれまでたくさん咲いていた草花や、多くの生き物があまり見られなくなります。その分これまで育ててきた生き物の世話や、紅葉する草花への興味が広がりを見せるようになりました。

【ダンゴムシ】

夏の間にたくさん捕まえたダンゴムシを室内で飼育しました。ダンゴムシは何を食べるのか図鑑を開くと、卵の殻を食べる事で体が大きくなる事が分かります。しかし、その日クラスには卵の殻がなかったのでどうしようかという話をしていると、翌日家の人に話をしたAちゃんが卵の殻を持ってきてくれました。保護者の方のご理解と協力のもと、園での興味が家庭と繋がっていました。

カマキリの様子を見てみると…



さくらグループ

作成者：保育士　2025.11.4（火）

以前のドキュメントでもお伝えしましたが、保育園の玄関扉にいたカマキリを捕まえて世話をしていたA君です。すみれグループのBちゃんから、**"カマキリは何を食べるのか"**や**"オスとメスの見分け方"**を聞いたりして、園庭でもカマキリにあげるための餌を探す姿がありました。

しばらく日が経ち、カマキリの様子を見ていましたが、動いていないことに気づいた保育士から、A君に声をかけると、「**寝ているのかな**」と話をしていました。カマキリのことを教えてくれていたBちゃんにカマキリの様子を見せると、「脱皮しているのかも」と話していました。

「小さい蛾を食べるんだよ。食べた？」とD君が気にかけてくれました。

また、すみれグループのC君も心配してバッタをお裾分けしにきてくれました。早速虫かごに入れ、「食べていなければ死んでしまっているってことだね」と様子を見てみることにしました。

死んじゃったかも…

今日の朝、カマキリがバッタを食べているかを見てみると、食べていませんでした。A君は、「脱皮じゃなくて死んじゃってるのかな」と考えていましたよ。保育士から、「どうして死んじゃったのかな？」と声をかけると、「もう一回調べたい」と話していました。生命について考える時間を大切にしていきたいです。

【落ち葉】
園庭の葉が緑から黄や赤色に変わった事に気がつくと、この変化が不思議で保育士にお気に入りの葉を見せてくれる子、気に入った葉をセロハンテープで紙に貼り付けて作品にする子等、その遊び方も一人ひとり異なりました。

色々な落ち葉を発見！

さくらグループ

作成者：保育士　　2025.11.6（木）

昨日、Aちゃんが葉脈だけが残った葉を園庭で見つけ大事そうに持っていたのですがなくなってしまいました。今日改めて園庭で探していると、色とりどりの落ち葉があることに気付いたBちゃんとAちゃん、「見てここはギザギザしてる！」「グラデーションになってる！」「これはツルツルしてる」「見てこの葉っぱ綺麗！」と心を動かしていました。自分の気になる落ち葉を集めながらBちゃんは「これ光に当てたらどうなるかな？」と太陽にかざしてみたり、「私は色々な葉っぱがあるから、触ったり見たりスタンプしたり、色んなことしてみたい！」、Aちゃんは「葉っぱを虹色に塗ってみたい！」と綺麗な色の葉を見つけ、そんな風に心を動かしながらも新たに出てくる考えや感じ方に、とても素敵な感性だなと感じさせられました。

「落ち葉に色をつけた」

葉っぱを触ったりよく見てみたりして色々な違いや感触、色に気付いた後、塗りたい葉っぱを選んで色付けが始まりました。
Bちゃんは鼻歌を歌いながらるんるんな気持ちで塗っていきます、Aちゃんはとても真剣に色を重ねていきます。

Cちゃんや、Dちゃんもその楽しそうに自然物で遊ぶ姿に興味を惹かれ、色を半分ずつにしてみたり、グラデーションに塗ってみたり、顔を描いてみたりしながら「また落ち葉拾ってくる！」と葉っぱ探しや葉っぱ選びも楽しんでいましたよ。

【砂場】

少なくなった園庭の砂場にたくさんの砂を入れ、ピアッツァという行事の際には砂場にシート敷きくつろげる場所として開放をしました。横になってくつろぐ子や相撲をとって遊ぶ子など、たくさんの砂があるからこそ、できる遊びを楽しみました。

新しい砂の中から貝殻を見つけた子どもたちからはなんで砂場に貝があるのだろうかと不思議に思う子もいました。貝を宝物のように探す子や、貝が入っているという事はこの砂は海から来たのかと考察する子もいます。また、サラサラとした砂がたくさんある事で力があまりない年少の子たちも、少ない力で大きな山や水の流れる川を自分の力で作ることができるようになりました。

【砂・土の違い】

夏場の土や泥遊びの経験を経てから、様々な感触に触れることで感覚統合が促される事や、一人ひとりの好きな感触を知るきっかけになってほしいと思い、秋にはたくさんの砂や土粘土を出しました。触ること自体に抵抗があった子もこの時期になると指先で触るだけなら楽しい等、自分にとって心地の良い遊び方を見つけられるようになりました。新しく用意した土粘土は陶芸用の土で水分を適切な量を加える事で子どもたちがこねやすい柔らかさになるります。しかし、再度使用する際には乾かしてから細かく砕いて土を練り上げる必要があり市販の油粘土よりも使用には工夫が必要です。そのため土粘土に詳しい専門の方からの助言をいただきながら使用しました。保育士側に工夫が必要なものの子どもたちからは日頃の油粘土だけでは見られないような、粘土の上に立つ姿や、地面に力強く投げる事で粘土を貼り付ける姿、大きな土粘土を両手の指で引っ掻く事で跡を残す姿、友だちの作品と繋げる姿等、様々な姿が見られました。

【冬】

冬になり秋よりもさらに生き物を見る機会減りますが、これまでの一年間で学んだ事を活かして苗を植えて育てる姿や、隠れていた生き物を見つけて調べる姿等、一年間の積み重ねを感じる場面が多く見られました。

A君　　３歳３ヶ月

これはイチゴ？

やま組ではイチゴを苗から育てています。最初は小さい苗でしたが毎日水やりをする中で徐々に葉は大きくなり、実をつける苗も出てきました。そんな苗を世話しいたある日、A君が不思議そうに「これはイチゴ？」と考え込んでいました。

なぜイチゴかどうか不思議に思っているのかというと、育ってきた苗は株分けをしていたのでプランターによっては、苗の名前や写真が描かれている札がないものもあります。そして時期的に実もまだついていない苗というものもありました。そして不思議そうにしていたのはまさにこの名前の札も実もない苗だったのです。そこでこれが本当にイチゴかどうかA君の検証が始まりました。

その１

まず目をつけたのは白いイチゴの実をつけたプランターです。はっきりと誰の目から見ても分かるイチゴの実に「これはイチゴ。黒いと食べられないよ、もうちょっとで美味しくなるよー」と、夏頃育てて知っていたイチゴの実についても話します。

その２

そして次は実のついたイチゴのプランターと隣のプランターを見比べて「これはイチゴ！だって同じ葉っぱだもん、一緒でしょ」と葉を見せながら説明をしていました。そしてさらに隣のプランターを見るとそこにはイチゴの札が刺さっていたので、「これはイチゴじゃあ、こっちもーイチゴ！」とついに不思議に思った苗はイチゴだと確信していました。

その３

ちなみにイチゴかどうかを調べている間、近くにあった葉っぱの大きさが違うブロッコリーに関しては「これは葉っぱだね」と、話していたのですが、イチゴを調べている時に札を見れば何を育てているか分かった経験から後ほど「これはブロッコリーだったね」とも、話していました。早速覚えた事を活かしているのが印象的でした。

イチゴかどうか。この不思議を考える上でどのような実がつくのか経験上知っていた事、同じ葉っぱということは同じ苗だという事に気づく視点。そして札を見た事で確信するという、これまでの経験も含めての検証が見て取れました。言葉でA君の不思議に答えるのはすぐできます。しかし、自身の力でここまで考えられる姿を見ていると、答えにすぐたどりつくよりももっと大切な学びがこの時間に込められているように思います。これからも一緒になってA君の不思議を見守っていきたいものです。

【イチゴ・ブロッコリーの苗植え】

２歳児クラスではイチゴとブロッコリーの苗を植えて育てました。植えた品種のブロッコリーは冬の間に収穫ができたので、いつもは野菜が苦手な子から「おうちのブロッコリーは食べないの、でもこれは食べる！」と、苦手なものでも自分で育てた事で食べてみようという気持ちになっているようです。また、イチゴは冬の間には実の収穫はできなかったものの、育てる中でA君のような気づきが子どもたちから見られました。育てる過程でたくさんの学びが生まれたようです。また育てている途中の苗は進級先のクラスに持っていくことになり年度を超えて興味は持続していきます。

A君　　３歳４ヶ月

2026/01/15　作成者：保育士

これは蝶々？

「先生見てーチョウチョいたよー！」と、園庭中に響き渡る元気な声が聞こえてきました。最近は寒くなり虫を見つけようとするものの中々見つからなかったので、子どもたちの喜びも相当なものだったようです。しかし大喜びする友だちを他所に1人冷静なA君の姿がありました。蝶々を発見したのはタイヤの中という事で本当の正体は三角に切り取られたゴムタイヤの破片が蝶々に見えたというものでした。するとA君は「んーこれは羽が一つで・・・お目目がない。チョウチョじゃないんじゃない」と、みんなに説明をします。その言葉にみんなで改めて見てみるとたしかに言った通りだと思ったようで「チョウチョじゃなかったー」と納得していました。生き物が大好きな分様々な生き物の知識があるA君だからこそ、冷静に判断できたのでしょうね。

【振り返り】

元々園庭にある桜や梅の木等の環境が子どもたちの遊びを豊かにするだけでなく、おやこの会で作った花壇や子どもたちと植えた種や苗により、より深く自然について興味を持つ姿が見られました。生き物については子どもたちからの興味が主ではあるものの、園の方針を理解して下さる保護者の協力もあり、家庭と園とが繋がり子どもの興味が途切れること無く続いていることの大切さを改めて感じました。また、土粘土や砂場の砂等は子どもたちの姿を見た上で用意をしたことで、これまでの遊びが更に広がりを見せました。子どもの姿、興味を子ども保護者、担任間で共有し子どもたちが試行錯誤できる環境の中で気付きが得られるような関わりをしていきたいと思います。

【振り返りによって得た保育者の気づき】

植物への興味関心は、草花の色や匂い、感触等子ども一人ひとり異なる姿が見られた。2歳児クラスでは春頃は桜の花びらの美しさに喜ぶ姿が見られたが、このような経験の積み重ねから草花への興味が始まったように思う。1年間を通して自分たちがプランターで種を植えるところから始めたひまわりやイチゴ、ブロッコリーを収穫した経験からは植物の生長が徐々に行われるもので、どの段階から花になるのか等、図鑑だけでは知り得なかった事に気付く姿が見られた。

また、生き物を育てる中で成長や変化に気付きつつ、生き物としての特徴を知り、言葉に出してその特徴を友だちに伝える姿も見られた。分かっているようで分かっていなかった生き物の体の特徴や命について実際に飼育し、観察することで昨日と今日とでの変化を楽しみに登園する姿も現れた。同じ生き物を観察する中で自分の思いを言葉にするだけでなく、友だちの考えも耳にすることで自然と対話が生まれる等、互いに新たな学びがあった。

素材としての自然物は時に絵の具を塗るキャンパスや、時に匂いを楽しめるものだった。身の回りに溢れる自然物だからこそ、子どもの興味に寄り添いながら視点を変えてみる事で、色や匂い、感触等、五感を通じて楽しめる物や、製作の素材として活用できる物があった。このような自然物は近くにあるからこそ、意図的に保育者が子どもの興味に目を向ける事で、一見するとささやかなように見えて大きな子どもたちの発見、気付きを知る事が出来る。保育士側がどのような視点で見守るのかが保育をする上でとても大切だという事を改めて感じた。